論文審査の結果の要旨

氏名：大　野　慎　也
博士の専攻分野の名称：博士（歯学）
論文題名：高齢者の口腔機能に対する介護予防事業の有効性
審査委員：（主査）　教授　前　野　正　夫
（副査）　教授　植　田　耕一郎　　教授　石　上　友　彦
教授　今　村　佳　樹

平成 18 年度の介護保険改定に伴い，予防給付と健康高齢者を対象にした地域支援事業が導入された。高齢者が増加の一途を辿る中で，介護保険は受給していないが，近い将来要介護状態になる恐れのある高齢者は,今後も一層の増加が見込まれるため,地域支援事業の担う役割は重要視されている。しかし,都市行政の主導で実施されている本支援事業の普及については,全国的に決して高くはなく，また，この事業の長期的，持続的効果に関する検証はなされていない。

そこで本論文の著者は，行政主導ではなく，全国的にほとんど例をみない歯科診療所単位での介護予防事業として口腔機能向上プログラムを企画･実施し,今後の事業展開のための指針を得るために，歯科診療所に来院する高齢者に対する健康の維持・増進に，このプログラムがどのような効果を与えるのかを検討した。

口腔機能向上プログラムの実施場所は，群馬県桐生歯科医師会会員の各歯科診療所とし，実施期間は，平成 24 年度から同 26 年度までの 3 年間とした。対象者は，各歯科診療所に通院する 65 歳以上の高齢者で，厚生労働省老健局の示す地域支援事業における基本チェックリストの，口腔に関する 3 項目の内 2 項目以上に「はい」と回答した者と，著しく口腔清掃状態不良の者とした。平成 24 年度から同 26 年度までにこのプログラムに参加した対象者は，延べ 252 名であった。問診，口腔内診査，オーラルディアドコキネシス（音節の交互反復運動），Repetitive Saliva Swallowing Test（RSST），主観的健康観およびプログラムの感想に関して，プログラム実施後の効果を実施前と比較して評価した。

その結果，以下の結論を得ている。

1. 問診では，食事に関して「どんなものでも噛んで食べられる」,「とてもおいしい」,「よく摂れている」，健康状態が「よい」との回答がプログラム実施後に増加した。
2. 口腔内診査では，口腔内清掃状況，舌苔および口腔乾燥に関してプログラム実施後に改善傾向が認められた。
3. オーラルディアドコキネシスでは，初回と 3 ヶ月後から即時的な効果が認められ，3 年間継続して参加した対象者は機能向上した状態が経年的に維持されていた。
4. RSST では，初回と 3 ヶ月後には即時的な効果は認められず，3 年間継続して参加した対象者は，初年度初回時から機能的変化はみられなかった。
5. 主観的健康観およびプログラムの感想では,「これからも続けていきたい」,「口腔ケアに対する意識が向上した」,「食事が楽しくなった」などの前向きな姿勢がみられた。

以上のことから，歯科診療所での口腔機能向上プログラムの実施は，高齢者の口腔機能を維持・向上させる可能性があることが示唆された。

以上のように，本論文は，歯科診療所単位での介護予防事業が，高齢者の口腔機能の維持・向上を介して「活力ある高齢社会の実現」に貢献できることを示唆したもので、臨床歯科学とくに摂食機能療法学の発展に寄与するところ大である。

よって本論文は，博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

平成２８年３月９日